

平成 29 年 4 月 30 日実施

「国家総合職」

人間科学

【心理学解説】

以下、共通問題の心理系の問題、選択問題の心理系の問題のみ、解説をつけています。
なお、各問題文は各自手持ちの問題冊子を参照のこと。

共通問題

No.3 ジンバルドーの没個性化実験

正答： 5

解説： 没個性化の実験を知らなくとも、試験スキルがあれば正答が出せる問題。

こうした実験結果のグラフを選ばせる問題の場合、一つだけ明らかに傾向が違うグラフがあればそれが正解になることがこれまでの試験でも何度かあった。本問もその典型である。つまり、選択肢5のグラフだけ、学習者の好ましさに関係なく「匿名条件(=没個性化)」の参加者は、「識別可能条件の参加者」よりも約2倍もの強い電気ショックを与えている。そういう手がかりを見つけて問題を解くのも一つのテクニックである。

ちなみに本問の実験手続きには書かれていないが、この実験では、電気ショックは誰が与えたかわからないようになっていると告げられている。これもまた没個性化を促進する条件であろう。

なお、この実験の出典は Zimbardo, P. G. 1970 The human choice: Individuation, reason and order versus deindividuation, impulse and chaos. In W. J. Arnold & D. Levine (eds.) Nebraska Symposium on Motivation, University of Nebraska Press.

No.5 統計の基礎概念

正答： 4

解説： 統計の基礎概念を問う問題。比較的容易だが、4の選択肢があまりよくない。

1 誤り。標準偏差の記述がおかしい。要素の平均値と各要素の差の自乗を平均して、開平したものの。本論の記述は平均(絶対)偏差のこと。計算が困難なのであまり用いられないことがない。

2 誤り。正規分布とポアソン分布とは異なる。正規分布はガウス分布、誤差分布などと呼ばれることがある。ポアソン分布は離散的な現象(雑に言えば珍しい現象)の場合に用いられる。プロシア戦争で馬に蹴られて死んだ人の数を調べるとこれに近似されたので有名。

3 中央値は、 n が偶数のときは真ん中を二つとって、それを便宜的に平均値をとってメディアンとしている。よって誤り。

4 正しい。選択肢としてはやや問題ありか。度数「分布」の代表値という書き方があまりよくない。受験者が迷うポイントかもしれない。モードは標本の中でもっとも頻出するものを意味するが、分布の代表値というわけではない。クラスの幅の取り方の問題もないわけではないが、むしろ問題となるのは、一様分布の場合、最頻値が多くなりすぎてしまい、代表値として意味がなくなることが問題であろう。

5 誤り。一文目は正しい。二文目、全数調査でも、解答誤差や適用不能誤差は十分生じうる。

心理系(選択 A)

No.6 初期の視覚処理過程

正答: 2

解説: 神経系の細かい知識が問われていて、やや難しい。

- 1 誤り。「プルキンエの遷移」ではなく、正しくは「コールラウシュの屈曲(遷移)」。また錐体桿体の記述も誤り。正しくは、明所で働くのは錐体、暗所で働くのが桿体である。
- 2 正しい。光情報は桿体や錐体の処理段階では化学的(過分極応答)、神経節細胞以降はインパルス(活動電位)の形で伝達される。
- 3 誤り。神経節細胞の受容野は同心円型の ON-OFF の二重構造である。楕円形で方向選択性を持つのは一次視覚野(V1)の受容野である。
- 4 誤り。三文目、「この際、左視野に対応する網膜から出た線維は左側の脳に入り、右視野に対応する網膜から出た線維は右側の脳に入る」が誤り。下線部を逆にすれば正しくなる。
- 5 誤り。外側膝状体は網膜から受け取った情報をさらに精緻に処理をしたり、色の処理も行う。「空間分解能が高く、色の違いに反応する」のは正しくは錐体、「空間分解能が低く、色の違いにほとんど反応しない」のは正しくは桿体についての説明であり、いずれも外側膝状体の大細胞層(M層)、小細胞層(P層)の機能ではない。

No.7 学習や記憶に関係する脳の構造や機能

正答: 3

解説: 選択肢の 2 や 4 が選択肢としてあまりうまくないように思われる。知識がないと正答が出せない問題。

- 1 誤り。グルタミン酸ではなく、正しくはドーパミン。神経系に詳しくない受験者でも、報酬系は聞いたことがあるだろうし、常識的に考えてグルタミン酸と快感情は関係なさそうだと気づけるのではないかな。
- 2 誤り。扁桃体が恐怖反応の古典的条件づけに関与していることが既に確かめられている。扁桃体は情動経験に関する学習・記憶に関わる働きを持つが、その機能は扁桃体を構成する特定の核に限定されるのではなく、全体に分散している可能性があることがこれらの実験から指摘されている。
- 3 正しい。
- 4 誤り。H. M.の症例についての説明自体が誤り。正しくは、H. M.は鏡映描写の課題では学習効果が見られたが、鏡映描写課題を行った事実は覚えられなかった。これは H. M.が著しい前向健忘を示していたことと合致する。
- 5 誤り。「再認は再生に比べて加齢の影響を受けやすい」が間違い。再生の方が加齢の影響を受けやすい。

No.8 空欄補充(英語)

正答： 4

解説： アメリカの心理学史(構成主義・機能主義～行動主義)についてである。ヴェント、ティチナー、ジェームズ、ワトソンなどの名前を多少なりとも知っていれば、英文を読み込むことなく解ける。

念のため、ざっと本文を訳す。

「19 世紀の間、化学と物理学は大きな進歩を示し、分子を原子に分析できるようになった。これらの成功は心理学者を勢いづけ、複雑な経験を作り出すもとなる心的要素を探させた。それはちょうど、科学者が水を水素と酸素に分解するように、心理学者はレモネードの味(知覚)を、甘い、苦い、冷たいといった感覚に分解するようなものである。

アメリカ合衆国においてこのアプローチを先導したのが、ティチナーで、彼はヴェントの下で学んだコーネル大学の心理学者だった。ティチナーは、心理学の流派を表すのに「A」という用語を導入した。

しかし、そうした「A」の純粹に分析的な本質に意を唱えた心理学者もいた。ハーバード大学の著名な心理学者ジェームズは、意識の要素の分析をあまり重要であるとは思わず、むしろ流動的な個人的な本質の理解が大事だと考えた。彼のアプローチは「B」と呼ばれたが、それは心がいかにして環境に適応し、機能できるかを研究するものであった。(中略)

「A」と「B」とは、20 世紀の心理学の初期の発展において重要な役割を果たした。両者それぞれの視点は、当時の競い合う複数の心理学派にシステマチックなアプローチを提供したからである。しかし 1920 年には、両者は新たな 3 つの学派によって置き換えられた。それらは、「C」、□、そして精神分析である。

これら 3 つのうち、「C」は北アメリカにおける科学的心理学に最大の影響を与えた。その創始者ワトソンは、心理学が意識的な経験を扱うものだという見方に反対した。ワトソンは動物や乳児の行動を研究するとき意識への言及をしなかった。」

以上の簡単な訳からもわかるとおり、A は構成主義、B は機能主義、C は行動主義である。

No.9 色知覚に関する空欄補充(英文)

正答： 5

解説： 英語なので人によってはわかりづらいところもあるだろうが、問われている内容自体はそれほど難しくはない。色の見え方についての基本的な知識で解ける。以下、簡単に訳す。

ア 色を見るということに関しては、一つの光受容体からの出力では何もわからない。異なる波長の強度の組合せの無数のセットが厳密に同じ反応を導き出すので、一つの光受容器の出力それ自体ではどの波長かはわからない。この制約は「A」の原理として知られる。

イ 色知覚の「B」理論によれば、特定の波長の光が 3 つの受容体メカニズムを異なる度合いで刺激し、3 つの受容体メカニズムの活動パターンが色の知覚となる。したがってそれぞれの波長は、神経系における 3 つの受容体メカニズムのそれぞれのパタンの活動によって表される。

ウ 私たちは一つの色の領域がもう一つの色の領域と接する世界に生きており、この近接性が色の現れ方を変える。色の「C」効果においては、一つの領域の色が隣接した領域にある反対の色を

引き出す。色の[D]効果においては、二つの色が互いに混ざり合い、それぞれが他方の色の質をいくらか帯びる。

エ 視覚系は光の特性(たとえば、夕方の‘金色’の光)から、世界の表面の特性(たとえば、イチゴの‘赤’)を見いだそうとする。たとえ表面と光の情報が結びついて眼に入力されたとしても。

色の[E]メカニズムは、世界についての暗黙的な知識を用いて異なる光からの影響を修正し、さまざまな条件下でもイチゴが赤に見えるようにしている。

以上から、Aは単一変数、Bは三色、Cは対比、Dは同化、Eは恒常、である。

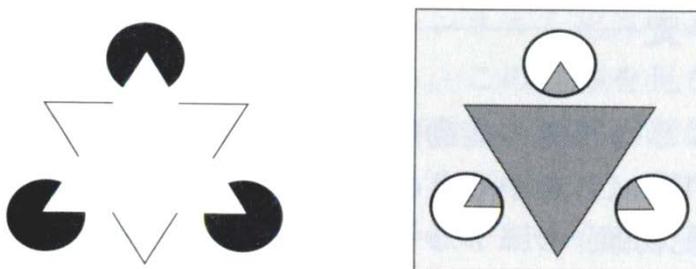
単一変数の原理は次のように説明される。「外界から入ってくる光は様々な波長を含んでいるが、それらは3種類の視細胞(R錐体、G錐体、B錐体)によって吸収される。しかし各視細胞は吸収している光の波長についてはわからない。各視細胞はただその波長に対する感度(吸収率)にしたがって光量子を吸収するだけである。これを単一変数の原理という」(三星・野口, 2015)

No.10 知覚的体制化

正答: 3

解説: ゲシュタルト心理学の成果に関する古典かつ基本的な問題。容易。

- 1 誤り。「共通運命の要因」は、ヴェルトハイマーが既に提唱したものである。
- 2 誤り。群化の要因間には明確な優劣関係はない。複数の要因が競合する場合には、「プレグナントの原理」によっていずれか一つの要因に従うことになる。
- 3 正しい。
- 4 誤り。主観的輪郭の説明は正しいが、アモーダル知覚というのが誤り。アモーダル(非感性的)知覚とは、遮蔽された部分に対する明確なモダリティを伴わずに成立する知覚(下図の右)のことである。これに対して、モーダル(感性的)知覚 実際には刺激が存在しないにもかかわらず、明確なモダリティ(輝度の変調など)を伴って生じる知覚(下図の左)を指す。主観的輪郭はモーダル知覚によるものである。



左がモーダル知覚の例、右がアモーダル知覚の例

- 5 誤り。人の関節に光点を取り付けて暗闇で動いたときの映像(二次元)を観察するというのは「バイオロジカルモーション」のことであるが、これはファイ現象ではない。ファイ現象というのは静止した二つの刺激が一定の間隔で出現と消失を繰り返す場合に観察される現象のこと。バイオロジカルモーションは、「一見バラバラに動いて見える光点群から、相互関連性を取り出して体制化したもの

と考えられ」ているわけだが、これはヨハンソンによって「知覚ベクトル分析モデル」と呼ばれる。

No.11 バンデューラの観察学習の四つの過程

正答： 4

解説： 英語だが、基本中の基本である。モデリングについて勉強していれば絶対に点が取れる問題。解説不要ではあるが念のためざっくり訳しておく。

A： 注意(Attention)： 観察によって学ぶためには、モデルとなる行動とその結果に注意を払わねばならない。誰かが食事の準備をするところを何度も見ていたとしたら、その間自分自身はその行動を成し遂げるのに十分な注意を払うことはできなかつたろう。またモデルを選ぶ。仲間、映画、ひいては有名人は目を惹くので効果的なモデルになりうる。

B： 保持(Retention)： ひとたび観察をすれば、その行動を取るまでに時間は刻々と経過する。観察した行動を呼び出し、その特定の性質を思い出すことができるだろうか。あたまの中でリハーサルをしたり観察した内容について考えることは、再生を助ける。

C： 運動再生(Reproduction)： 必要な行動を観察したとしても、自分自身でやってみなければならぬ。シェフがピザ生地を空中に投げるのを見たとしても、その行動を再生産して正しく実行することはできないかもしれない。

D： 動機づけ(Motivation)： 観察者が行動に出るかどうかは、その行動に報酬が与えられるか望ましい結果を導くかによって決まる。モデルがその行動によって報酬を得、観察者がその行動に自ら望むものがあるとみなした場合に、人はその行動をより模倣しやすくなる。

No.12 条件づけ

正答： 1

解説： 基本かつ古典。易しい。これも必ず正答すべき問題。

ア 誤り。条件づけを二つに分類したのはスキナー。また、「反応に先行する刺激によって反応が誘発される」のは厳密にはレスポナント条件づけのみである。

イ 正しい。

ウ 誤り。負の強化とは正しくは、「反応が生じた場合に刺激を呈示することによって、反応の頻度が上がる場合」である。本選択肢の定義も例も「(正の)罰」の説明である。

エ 誤り。正の罰とは正しくは、「反応が生じた場合に刺激を呈示することによって、反応の頻度が低下する場合」である。本選択肢の定義も例も「負の罰」の説明である。

No.13 攻撃行動

正答： 5

解説： 古典的な攻撃行動の理論についての出題。一見易しそうだが、細かい知識を問うているので実は少しばかり難しいかも。

1 誤り。何よりもまずロレンツは、「脳の下垂体に攻撃中枢があることを明らかに」はしていない。水圧

モデルの説明はまあ正しいと思うが、より正確には、内的衝動(攻撃ポテンシャル)があまりに高くなると、解発刺激がなくても水があふれ出すように攻撃行動が自然発生する、というモデル。

2 誤り。攻撃行動を動機づけるのは「怒りや憎しみのような敵対的な不快感情だけ」ではなく、「不快感情全般」である。バーコヴィッツが、冷水に手を浸した実験参加者は温水に手を浸した参加者よりも攻撃行動が強く出たという実験(Berkowitz & Heimer, 1989)において、冷水に手を浸すという嫌悪的な経験が不快感情を生じ、それが攻撃動機づけを高めたと結論している。

3 誤り。テダスキは、大淵憲一と同じく攻撃行動の社会的機能について言及している。攻撃行動の社会的機能説では、人は「無意識に攻撃行動という手段を選択する」のではなく、ヒトの意図的、戦略的に攻撃行動に焦点をあてているところがポイントである。

4 誤り。「自己成長的な正の本能エネルギー(=エロス)」ではなく、正しくは「自己破壊衝動(=タナトス)」である。

5 正しい。ダラードらは、「攻撃行動は常に欲求不満によって喚起される」「攻撃行動の背景には必ず欲求不満がある」という主張をしている。またダラードらは、欲求不満が別の手段で発散されれば(例えば暴力的な映画を観てカタルシスを得るとか)、攻撃行動は生じなくなるとしている。このことはすなわち、攻撃行動は欲求不満による不快感情の発散の手段ということである。

No.14 パーソナリティ検査

正答：5

解説：正答の選択肢(片口法)が稀有な知識を問うているが、それ以外の選択肢の正誤は判別しやすいので消去法で解ける。

1 誤り。ミネソタ多面人格目録(MMPI)は、正しくは10の臨床尺度からなる。またF尺度は、正しくは「項目に対して逸脱的に答える尺度であり、精神病理の程度をも示す指標となるもの。健康な人であれば10%以下の出現率となるような項目で構成されている。項目の具体例として、「誰かが私の心を動かそうとしている」、「誰かが私に催眠術をかけて私を操ろうとしている」、「月に数回以上下痢をする」などがある。本選択肢にある「表面上は自己統制…」というのはK尺度である。

2 誤り。文章完成法(SCT)は、無意識レベルではなく、比較的浅い前意識レベルを明らかにするテストである。

3 誤り。内田=クレペリン検査は、正しくは一ケタの数字を加算してその答えの一の位を記していく検査である。また、「現在抱えている心理的問題」を判断する検査ではない。

4 誤り。「反応歪曲が生じない」が誤り。YG検査には妥当性尺度(いわゆるL尺度など)がなく、回答者の反応歪曲があってもそれを検出できないため、それが欠点であるといわれる。

5 正しい。ロールシャッハは今日ではエクスナー法等が一般的になり、片口法はもはやポピュラーではない。本問を解くにあたって片口法の知識は必須ではなく、他の選択肢の間違いを見つけ出して消去法的に5を選べればOKだろう。

No.15 言葉の定型的な発達

正答： 5

解説： 乳幼児の言語発達についてある程度知識がないと解けない。標準的な問題。

1 誤り。生後 6 か月頃から重複喃語(重音性の喃語:バババ, マンマンマンなど)が出現し, 後に多様喃語(混合性の喃語:パデゥなど複数の音が混ざる)が出現する。また, 喃語の音のパターンと初期の発話で使われる音のパターンには関連性があるといわれている。

2 誤り。一文目は正しい。初語は生後 10~15 か月頃である。命名(語彙)爆発が 5, 6 歳頃というのが誤りで, 正しくは 1 歳半過ぎ頃に語彙が 50 語を超えるころから急激に増加する。

3 誤り。共同注意は 9 か月頃から発達するとされる。また共同注意に高度な推論は不要である。

4 誤り。マークマンの相互排他ルール(相互排他仮説)とは, 同一のカテゴリには一つの言語ラベルしかつかないとみなす傾向のことを指す。本選択肢にある「新しいラベルは対象全体に対するものであり, 対象の部分, 性質, その他の特性を示すものではない」というのは「対象全体仮説(whole object assumption)」である。

5 正しい。「しりとり遊び」は, 音韻意識の発達と密接な関係がある。しりとりができるためには, 「き・つ・ね」など音を区切る能力, 相手の示した語の語尾音を抽出する能力, 特定の語頭音を持つ単語を心的辞書で検索する能力が必要である。つまり, しりとりのためには, 単語の意味を理解するだけではなく, ことばを音の組合せとして理解する音韻意識が必要ということである。

No.16 感情の定型的な発達

正答： 2

解説： 基本的な知識を問う, 標準的な問題。

1 誤り。ブリッジスの研究では, 誕生直後はどんな刺激に対しても単なる「興奮」を示す。その後, 「不快」「快」が表れ, 生後 2 年の間に, 「快」から「得意」「愛情」「喜び」が分化し, 「不快」から「怒り」「嫌悪」「恐怖」が分化することを示した。

2 正しい。情動伝染(emotional contagion)は, 共鳴動作(co-action)や動作的模倣(motor mimicry)と同様に, ほぼ純粋に身体動作レベルの同調作用(多くの生物種に認められるような原初的共感性の機構)と考えられている。(引用:高橋・谷口「感情と心理学」北大路書房)

3 誤り。養育者の表情などの外的刺激に対する反応として起こるほほえみは, 正しくは「外発的微笑」あるいは「社会的微笑」である。自発的微笑とは, 誕生後間もない乳児が相手の表情などの外的な刺激に関係なく微笑むことを指し, 睡眠中にもみられる微笑である。

4 誤り。ギブソンらの 1960 年の論文では, 6 か月から 14 か月の乳児に視覚的断崖の実験を行った結果, 6 か月以降のハイハイのできる乳児は, 恐怖が喚起され崖の向こう側にわたることを回避したということがわかっている。

5 誤り。本選択肢の説明は, 正しくは「社会的参照(social reference)」である。Campos らの視覚的断崖を用いた実験では, 乳児が母親の表情を手がかりにして断崖を渡るかどうかを判断していたが, これが社会的参照である。ちなみに「社会的表示規則」とは, 「どのような対人状況ではどの情動の表出を抑制すべきか, あるいは強調すべきか」といったことに関する暗黙の社会的ルールのこと

(引用:高橋・谷口「感情と心理学」北大路書房)。

No.17 相関と回帰

正答: 1

解説: 相関と回帰についての理解を求めるもの。相関だけ、回帰だけでの理解はできている人もいるだろうが、両者をまとめて理解しておくことを目標にしたい。やや難しい問題。

1 正しい。これは回帰直線の傾きと相関係数の関係を知っていないと解けない。

事前も事後も偏差値であるので、標準偏差はいずれも 10 になる。まずここが肝心である。次に回帰直線の傾きは二種類の計算法がある。これを知っておく必要がある。

共分散/ x の分散、あるいは相関係数 \times (y の標準偏差/ x の標準偏差)である。

『Q&A 心理データ解析』p.62.参照。

ここから、標準偏差が同じであるので、後者の式から、傾きは相関係数に一致する。したがって正しい。

*ただし、いつも一致すると早のみこみしてはいけない。標準偏差が両者の間で異なる場合は、一致しない。ここが相関係数と回帰係数とを混同している人にはうっかりする。回帰は、 y 軸方向を最小自乗法で予測するのに対し、相関係数は x も y も考慮に入れる点が大きく異なる。したがって、回帰直線の傾きと相関係数とは直接的には関係しない(もちろん上記の式のように間接的には関係する)。散布図の中間(真ん中)を突き刺しているのが回帰直線と即断しないようにしてほしい。

2 誤り。1 の後者の式を参照すると、少なくとも傾きが相関係数に一致することが分かる。とすると、相関係数が1の場合は1になるので、1よりも小さくなるとは言い切れない。

3 誤り。相関係数が 0.8 という情報だけで、偏差値の 10 の差から予測差を求めることはできない。

4 誤り。典型的な「回帰効果」と言える現象である。事前で低い者に着目すると、事後ではそれよりは成績が上昇することは、何か原因があって生じるのではなく「統計的」「論理的」に普通にあることである。ごく分かりやすく言えば、低い成績はそれ以上低くならないので、高くなるしかない。高い成績はそれ以上は高くないので、低くなるしかない。それに原因帰属を人間はしたくなるので、意味を求めてしまう。いわゆる「回帰の誤謬」をおかしてしまうのである。

5 誤り。これは 4 とは逆の話だが、やはりこれも「回帰効果」と言える現象である。事後で高い者のみに着目すると、相関係数が1でなければ、必ず上位と下位(中位)との入れ代わりが生じる。したがって、相関係数が 0.8 であれば、このような現象は普通に生じる。

No.18 標準正規分布や z 得点

正答: 2

解説: これはごく簡単な基礎的な問題。得点源にしたい。たいていの初歩的な統計のテキストでは演習がなされているはずである。

1 平均値を z 得点で考えると、0 になるので誤り。

2 正しい。20 点が平均なのだから、20 から 36 点の割合をまず考えてみる。

z 得点を出すと、 $(36-20)/10=1.6$ 1.6 までの面積が 0.4452

同じく、4 から 20 点までの割合を考えて z 得点を出すと、

$(4-20)/10=-1.6$ 左右対称なので、1.6 までの面積は同じ。

両者を加えると 0.89 ゆえ正しい。

3 z 得点で 1.2 の部分は 0.3849

これは平均からの面積なので、 $0.5-0.3849=0.1151$

したがって、上位約 11.5%となるので誤り。

4 偏差値が 65 ということは、 z 得点に戻すと、

$(65-50)/10=1.5$

したがって、1.5SD だけ大きいことを示すので誤り。

5 下位 30.5%ということは、平均からは

$0.5-0.305=0.195$ の面積分が低いということになる。

左右対称なので、面積が 0.195 の部分は 0.51。

したがって、 -0.51 が z 得点になるので誤り。

No.19 分散分析

正答： 3

解説： 分散分析と交互作用に関する理解を問う問題。かなり容易。大学で実験の分析を行ったり、論文を読み慣れていれば、それほど難しい問題ではない。ポイントは主効果が性別、年代別という要因の効果を意味するものであり、交互作用は、両者の組み合わせで主効果のみでは説明できない部分があるかどうかを意味するものであることを理解することである。

きちんと計算するという解法もあるが、それだと時間がかかりすぎる。時間をかけずにざっと読み取る方法を紹介する。消去法で解いていく。

交互作用 = ×状態になっているという理解をしている人もいるだろう。それは必ずしも誤りではないのだが、むしろグラフの傾斜に着目すると分かりやすい。交わることなくとも、傾斜に差がある場合は交互作用はある場合がほとんどである(サンプル数によるが)。

グループ分けをすると、選択肢の 1, 2 は明らかに交互作用あり。3 と 4 は交互作用なし。5 は微妙なところ(あるかもしれない)。

これで 1 と 4 が誤りであることは自明。

主効果というのはたとえば性別間で差があるかどうかということ。そこに年代が絡むのだが、性別をみるときに年代を一旦無視して、まとめてしまったときに差があるかどうかをみるとよい。

性別の主効果に着目すると、1, 2 はなし。3, 4, 5 はあり。

これで 1 と 4 と 5 が誤りであることは自明。

次に年代の主効果を、性別を無視してまとめて眺めると、

1, 2, 3, 4 はあり。5 は微妙だがあるか？

これで2が誤り。

以上から、選択肢3のみが消去法を逃れる。

No.20 カイ二乗検定

正答： 4

解説： カイ二乗検定に関する問題。頻出である。ただし、これは結構練られている問題であり、少し難しい。ある程度深い理解を求める問題である。

1 2×2 のクロス集計表の自由度は(2-1)×(2-1)=1 なので、誤り。

2 誤り。よくできたダミーの選択肢。確かに母集団について厳しい仮定は不要だが、だからこそ、名義尺度(ある, ない)であるにもかかわらず、検定することができるのである。

無作為抽出をしないのならば、カイ二乗検定よりも制約条件がない、ランダムマイゼーション検定を用いる必要がある。

3 誤り。これもよくできたダミーの選択肢。カイ二乗検定は、別の言い方をすれば、「分布の一様性の検定」であり、「分割表の独立性の検定」である。したがって、確かに観測度数と理論度数の差(を加工したカイ二乗値)を調べているのだが、その差が一様か不均一であるかを調べているのであり、「一致」していることを調べているわけではないので誤り。

4 正しい。手計算でもできるのだが、タテの合計値が 100, 50 であるのに対して、ヨコの合計値が 78, 72 と少し半端な数値であり、結構計算が面倒である。他を消去法で消して行って、後回しにして、他に妥当なものが確信して見つければ、それで計算をやめてしまうのが賢いと思う。時間が合ったときに検算してはどうだろう。残念ながらこれが正しいので、結局時間がかかってしまう。

78を2:1に分配して52と26。72を2:1に分配して48と24。これが期待度数となる。観測度数と期待度数の差を二乗して総和したものがカイ二乗値。

$$(57-52)^2/52 + (21-26)^2/26 + (43-48)^2/48 + (29-24)^2/24$$

$$=0.48+0.96+0.52+1.04=3.00$$

これは5%水準では非有意となる。したがってこの選択肢が正しい。

参考までに正確に計算すると、p値は0.08。

5 誤り。φ係数についての理解を問う問題。ごく容易。瞬時に解けるはず。

φ係数はカイ二乗値をnで割って、開平した(全体にルートをかけた)もの。縦と横との連関を示すもの。名義尺度間の連関であるので、マイナスになるわけがない。ルートをとったものなので、負の値にはならない。正確に計算するとφ係数は0.14

認知心理学

No. 36 推理や推論

正答： 2

解説： 標準的な問題。この問題、「市川伸一編 認知心理学 4 思考 東大出版会」から出題され

ているように思われる。

1 誤り。本選択肢の推論は、正しくは「前件否定の誤謬(fallacy of denial of the antecedent)」である。後件肯定の錯誤(fallacy of affirmation of the consequent)とは、「もし A ならば B」と「B である」から「A である」と結論する推論のこと。本選択肢の条件文でいうと「もし雨ならば今日の遠足は中止である。」と「遠足は中止である」から、「今日は雨である」を結論することである。

2 正しい。

3 誤り。本選択肢のように、文の意味内容が推論に影響を及ぼすことを、「信念バイアス」という。「雰囲気仮説」とは、三段論法において①前提に一つでも否定が含まれている場合には、否定的結論を選ぶ傾向があり、そうでなければ肯定の結論を選ぶ、②少なくとも一方の前提が特称の限量子(「いくらかの」)を含む場合は、特称の限量子を含む結論を選び、そうでなければ全称の限量子(「すべての」「どの～もない」)を選ぶ、という仮説のこと。

4 誤り。確証バイアスは、帰納的推論課題の「2-4-6 課題」でも、演繹的推論課題の「4 枚カード問題」でもしばしば生じる。

5 誤り。連言錯誤ではなく、正しくは「ランダム系列の誤認知」または「ギャンブラーの錯誤」である。この現象は「代表性ヒューリスティック」によって説明できる。すなわち、毎試行が表か裏か独立であるランダム事象についての代表的な知識(表・裏が頻繁に交替して出現する)を持っているために生じるというわけ。

No. 37 視覚パターンや物体の認識

正答: 1

解説: パンデモニアム・モデルを知っていれば、これが正解とすぐ分かる問題。しかし選択肢に盛り込まれる知識に妙な偏りがあって解きにくい。

ア 誤り。鋳型照合モデルとパーセプトロンは何の関係もない。

イ 正しい。ところで、この問題の本選択肢に漢字の誤用がある。「例えたものといえる」は本来ならば、「喩えた」を使わねばならない。

ウ 誤り。ユールズ(Julesz, B: ユレシュとも)といえばランダムドットステレオグラムを考案した人であり「部品による認識理論」とは無関係。「部品による認識理論(RBC 理論)」はビーダーマンである。ビーダーマンは、「ジオン」と呼ばれる 24 個の基本形状を考え、これによって物体の内部表現を考えようとした。3 次元物体の認知には、円柱や四角柱、三角柱、三角錐、フットボール型などが想定されている。複雑な 3 次元物体も、こうした要素に分解されて認識されると考えるものである。

ちなみにテクストンとは、テクスチャー知覚の基本要素のことであり、ユレシュの昔の研究にあるのだが、マイナーすぎて普通に心理学を勉強している人でもこれを知っている人はほとんどいないだろう。

エ 4 文目が誤り。正しくは「3 次元物体は、まず観察者から見える姿で観察者中心座標系により記述され、その後に観察者の位置に依存しない物体中心座標系による記述へと変換される」である。

視点取得の問題に関して、視点非依存と視点依存の二つのアプローチがある。視点非依存アプ

ローチでは、3次元物体は、まず観察者から見えるそのままの姿で入力される(観察者中心座標系での記述)。その後、あらためて観察者の位置に依存しない内部表現に書き換えられる(物体中心座標系での記述)。視点非依存アプローチは D.マー(計算理論の人)が代表的であるが、ピーダーマンの RBC 理論もこの立場にある。

視点依存アプローチは、物体認知は視点に依存するという考え方である。既知の物体のように典型的景観が保持されている物体認知は、視点が変わってもその同定は容易であるが、既知性の低い物体の場合には、視点が変化すると同定できなくなることが多いのだが、現実の研究でも、物体認知成績が強い視点依存性を示すという結果があるとのことである。

(引用:箱田・都築・川畑・萩原 認知心理学 有斐閣)

No. 38 記憶

正答: 4

解説: 記憶についての基本的な問題。選択肢は高野陽太郎 認知心理学 2 記憶 東大出版会」から採られているようである。

- 1 誤り。一般には処理水準が深くなるほど再認成績は向上するが、音韻の再認が求められるテストの場合は、意味処理より音韻処理の方が成績が良くなる。
- 2 誤り。気分一致効果とは、特定の気分の下では、その気分の持つ性質に一致する記憶や判断、行動が促進されることを指す。つまり、楽しい気分のときには楽しいことを思い出しやすく、悲しい気分のときは悲しいことを思い出しやすいといったことである。決して、気分の高まりが記憶成績をよくするというのではなく、教育現場でも活用されていない。
- 3 誤り。まず、「記銘材料に情報を付加してまとめて覚えやすくする記銘方略」は精緻化と呼ばれる。記銘方略でいうところの精緻化と体制化は厳密な区別はしにくいですが、体制化の方は、複数の記憶材料をより大きなまとまりに構成したり、意味的に関連付けて文を作ったりするという意味合いがある。記銘語に付加される情報が多いほど記銘語が検索される可能性が増すという事実はあるが、STEINらの研究では、記銘語に付加される情報量よりも、孵化される情報の質が記銘語の記憶成績に重要であることを示した。
- 4 正しい。
- 5 誤り。メタ認知についての説明は正しい。メタ認知が記憶の有効な方略であることを報告したのはタルヴィングではなく、フラヴェル(Flavell)である。

No.39 ヴィゴツキーの理論

正答: 4

解説: ヴィゴツキー理論をある程度深く知っていないと難しい。

- 1 誤り。ヴィゴツキーの考えに基づけば「言語が論理的思考を達成する媒介物となる以前の段階(≡内言を獲得する以前の段階)」では認知構造は発達しない。内言が獲得されることで、概念が体系化され、抽象的、論理的思考が可能になり、認知構造が発達していく。

2 誤り。まず、「学習の効果は身体的成熟の水準に依存する」が間違い。次に「予測的発達水準ではなく、現下の発達水準に基づく教育の必要性を強調」が間違い。ヴィゴツキーは発達の最近接領域の概念において、学習の効果と身体的成熟との関連については言及していない。また、ヴィゴツキーは、現在の発達水準と予測的発達水準の差にあたる「最近接領域」の部分に教育的な働きかけが必要と主張した。

3 誤り。ヴィゴツキーは、高次の精神機能は生まれながらに人に備わっているものではなく、社会的な相互作用を通じて形成されると考えた。特に「文法カテゴリーや文構造等に関する知識」は内言にあたるものであり、これらは周囲との相互作用によって内化されるものである。

4 正しい。ここでいう「心理的道具」の重要な一つが言語である(外言や内言を含む)。

5 誤り。これは文化的学習ではなく、いわゆる「心の理解」の発達である。

No.40 意思決定

正答：4

解説：行動経済学でもしばしば扱われるトピックの出題。ヒューリスティック、アレのパラドクス、プロスペクト理論、フレーミング効果は講義でも扱っているし直感的にわかりやすい話なので、一度でも習っていれば正答が出せるはず。

1 誤り。規範的理論と記述的理論が逆。

2 誤り。アレのパラドクスは、確実性効果(人が不確実な選択肢より確実な選択肢を高く評価する傾向)を示した実験。むしろ期待効用理論を反証するものである。

3 誤り。正しくは「価値関数は、利益より損失の勾配が急である」。また、一般に人は利得に関してはリスク回避、損失に関してはリスク追求の傾向がある。(注:この場合の「リスク」とは「確率で表される事象」といった意味合い)

4 正しい。

5 誤り。代表性ヒューリスティックと利用可能性ヒューリスティックが逆。

臨床心理学

No.41 DSM-5における心的外傷後ストレス障害

正答：2

解説：PTSDに関する基本的知識を問うている。

ア 誤り。「闘病生活を過ごしてきた配偶者を看取るような大きな喪失体験」はPTSDの診断には含まれない。

イ 誤り。「入眠や睡眠維持の困難、浅眠といった睡眠障害が生じることはまれ」が誤り。

ウ 正しい。

エ DSM-5の記述では、2文目までは正しい。また心的外傷出来事の体験後に社会的支援がないことが症状を長引かせることも書かれている。

おそらく、「発症後の危険要因として、心的外傷的出来事の最中に生じてその後も持続する解離症

状があること」というのが間違いと思われる(のだが、それに関する記述を見つけることができない。後に調べ直して追記の予定)。

No.42 認知行動療法に関する英文の空欄補充

正答: 3

解説:

ざっと訳すと以下の通り。

「簡潔に述べると、認知モデルでは、**A**思考があらゆる心理学的障害に共通している。人々が自分の思考についてより現実的に適応的に評価するしかたを学べば、感情状態や行動の改善を経験する。たとえば、もしあなたが完全に落ち込んでいたとしたら、「私はなにもうまくできない」という**B**思考、つまりすぐに浮かび上がってくる考えがあるかもしれない。この思考は特定の反応を導く。つまりあなたは悲しく感じてベッドに入るかもしれない。もしあなたがそこでこの考えの妥当性を吟味したなら、あなたは自分が**C**をしていて、実のところはあなたは多くのことをうまくできるのだ。自分の経験をこの新たな視点から見ることで、あなたは気分がよくなり、より機能的に行動するようになるだろう。

患者の気分と行動の改善がより長続きするよう、認知療法家は認知のより深いレベルに働きかける。つまり、患者の自分自身や世界や他者に対する基本的信念に働きかける。彼らの土台となっている**A**信念の変容は、より持続的な変化を生み出す。例えば、もしあなたがいつも自分の能力を過小評価するなら、そこには無能という基本的信念がある。この**D**信念を変容することで、あなたが日々出会う特定の状況の知覚を変えうる。あなたはもはや「私はなにもうまくできない」というテーマとともに多くのことを考えることはなくなるだろう。その代り、あなたが失敗をするような特定の状況において、「私はこれ(この特定の課題)がうまくできない」と考えるようになるだろう。」

- A: 非機能的
- B: 自動
- C: 過度な一般化
- D: 一般的

No.43 心理臨床実践における倫理

正答: 1

解説: 正解の選択肢がきわめて明確なので正答しやすいが、各選択肢で述べられていることはかなり詳しく専門的である。やや難。

- 1 正しい。インフォームドコンセントとクライアントの自己決定権の尊重である。
- 2 誤り。対象者に判断能力がないとしても、本人にも説明をして同意・不同意の意思を聞くことは、クライアントを一人の人間として扱うという意味でも重要である。
- 3 誤り。スーパーバイザーがスーパーバイジーをクライアントとして心理療法をするのは、「多重関係」に該当するものであり、推奨されない。

4 誤り。治療者本人が専門知識や技能を持たず、さらにスーパーバイザーもそれを熟知していない場合、専門性の範囲を超えてその査定法を実施することは推奨されない。

5 誤り。臨床心理学における研究は医学研究と同程度の倫理規定がある(丹野, 2015)。ヘルシンキ宣言によれば、「インフォームドコンセントがあり、専門家の助言を求めたうえ、医師の判断において、その治療で生命を救う、健康を回復するまたは苦痛を緩和する望みがあるのであれば、証明されていない治療を実施することができる」とある。この規程に従えば、「まだ確立されていない実験的段階にある方法を用いて査定又は治療」をすることもできると考えられる。ただし同じくヘルシンキ宣言にあるように「この治療は、引き続き安全性と有効性を評価するために計画された研究の対象とされるべきである。すべての事例において新しい情報は記録され、適切な場合には公表されなければならない」。

(引用: 丹野他 臨床心理学 有斐閣)

No.44 精神分析の諸理論

正答: 3

解説: 標準的な問題。近年アドラーが流行っているので、ひょっとすると精神分析に詳しくなくとも正答がすぐに見つかる人もいるかもしれない。

1 誤り。「関与しながらの観察」は H. S. サリヴァンである。関与しながらの観察とは、分析治療の中では、治療者は一方的な観察者ではありえず、必ず治療者自身の人格が治療の中に大きな影響を与えており、治療の中に関与している治療者自身の要因をも含めて患者の精神状態を考えなければいけないという姿勢のことである。なお、一文目の「神経症的不安は基底不安によるもの」というところはホーナイの考えとして正しい。

2 誤り。「乳幼児の発達段階を、正常自閉期、共生期、分離-個体化期に区分」したのは M. マーラーである。なお、「ほどよい母親」のところはウィニコットの記述として正しい。

3 正しい。

4 誤り。「甘え」という概念を用いて日本人の精神構造や社会文化構造を説明したのは土居健郎。古澤は、日本の臨床的精神分析の基礎を作った精神分析学者で、阿闍世コンプレックスの理論を唱えたことで有名。阿闍世コンプレックスとは、母と子の結びつきにおける心の深層に存在する錯綜した感情のことを指す。

5 誤り。「分裂、投影性同一視、原始的否認、原始的理想化等の原始的防衛機制」を提唱したのは、M. クラインである。それ以外の部分は A. フロイトについての記述として正しい。

No. 45 ロジャーズの理論や実践

正答: 5

解説: 頻出かつ基本。易しい。

1 誤り。カウンセラーが「問題解決の方法を理解し、それを言語化して伝えることによってクライエント自身に気づかせ、問題解決に導く」は間違い。カウンセラーは例の態度条件をもってクライエン

トに対応することで、クライアント自身に建設的なパーソナリティ変化が起こり、問題解決に向かうとした。

2 誤り。「客観的事実が真実であることに気づかせる」のではなく、そのときどきに体験している過程の中に生きることが真実であると感じることが不可欠であるとロジャーズは考えた。

3 誤り。「クライアントの感情の中に巻き込まれる過程を経ながら」ではなく、「クライアントの感情をあたかも自分自身のものであるかのように感じ取り、しかもその感情に巻き込まれないようにする」のが重要であるとされる。

4 誤り。「認知の歪み」が間違い。正しくは、心理的不適応は「自己概念と体験の不一致」に起因するとロジャーズは考えた。

5 正しい。

教育心理学

No.51 知覚=運動学習, 技能学習または運動学習

正答: 1

解説: 技能学習や運動学習についての知識を問う問題は昔から頻出である。標準的な問題。

1 正しい。

2 誤り。「遂行の知識」ではなく「結果の知識(KR; knowledge of result)が正しい。

3 誤り。

4 誤り。「全習法」→「集中学習」, 「分習法」→「分散学習」である。

5 誤り。「負の転移」ではなく「両側性転移」である。

No.52 内発的動機づけ

正答: 2

解説: ハーロウの好奇動機やホワイトのコンピテンスなど古典的な研究をひっばってきている。やや難か。

1 誤り。一文目は正しい。二文目が間違っている。ハーロウがサルに知恵の輪のようなパズルを与えた実験があるが、この時サルは報酬としての餌がないにもかかわらずパズルを解き続けた。このことからハーロウは内発的動機づけとしての好奇動機があることを示した。

2 正しい。

3 誤り。ホワイトが唱えた「自分を取り巻く環境と効果的に交互作用する(潜在的)能力」とはコンピテンスであり、これは生理学的な基礎を持たない(=生理的動因に依拠しない)概念である。さらにはコンピテンスの動機づけの側面を強調するときにイフェクタンスという用語を用いる。(引用: 東洋・繁多・田島編 発達心理学ハンドブック 福村出版)

4 誤り。クレスピ効果ではなく、「過正当化効果(過剰な正当化効果)」または「アンダーマイニング効果」または「レッパー効果」などと呼ばれる。また、実験内容も誤っている。正しくは、「絵を描けば報酬が与えられるという事前の約束」のある条件で、「絵を描く意欲が低下した」のである。つまり、

報酬そのものが内発的動機づけを低下させるのではなく、その与え方が問題であると考えられた。

ちなみにクレスピ効果とは、オペラント条件づけにおいて報酬の量が急に少なくなると遂行成績が急激に落ちることである。

5 誤り。「自己の行為を正当化するために自己決定感を高めようとする認知的機制が働き」というメカニズムは、デシの理論にはない。本選択肢でいうところの「言語的報酬」が「褒めること」を指していると仮定すると、デシの認知的評価理論では、外発的な報酬(言語的報酬)によって自己決定感と有能感が高まり、内発的な動機づけは上がる、と説明できる。

No.53 教育における評価

正答： 2

解説： 教育評価に関する基本的な問題。易しい。

1 誤り。「教育評価」と「教育測定」の説明が逆。ちなみに教育評価は、学習者のみならず、授業評価やカリキュラム評価をも含む概念である。

2 正しい。「羅生門」というのは芥川龍之介の小説から採られた。

3 誤り。活動前に行う事前評価は「診断的評価」、活動途中で行うのが「形成的評価」、活動後に行う事後評価が「総括的評価」である。これらの概念は完全習得学習を提唱したブルーム(Bloom)によるもの。

4 誤り。「信頼性」ではなく正しくは「妥当性」である。

5 誤り。「パフォーマンス評価」とは、正しくは「パフォーマンスを通じて行われる評価」であり、「ある特定の文脈のもとで、様々な知識や技能を用いて行われる人の振る舞いや作品を、直接的に評価する方法」である。(引用:誠信心理学事典新版)

No.54 学習方法の理論

正答： 1

解説： ジグゾー学習、バズ・セッションは昔からときどき出題されている。このほか、有意味受容学習、発見学習、プログラム学習など教授学習方略は、出題頻度はそれほど高くないが、定番の出題テーマである。本問は標準的レベル。

A 正しい。

B 誤り。「状況的学習論」とは、学習を、特定の知識や技能が獲得されることではなく、その人が何らかの社会的実践に参加していくものであると考える。「正統的周辺参加」とは、ある人(学習者)が、実践共同体の正式メンバーとして実際の活動に参加しながら、徐々に深くその共同体の活動に関与していく過程全体を指す。

C 誤り。「総括的評価」ではなく、「形成的評価」である。「総括的評価」は、事後に行う評価で、指導の効果をトータルに検討し、次の指導等に役立てるもの。

D 誤り。本選択肢にはアロンソンのジグゾー学習と、フィリップスのバズセッションが混ざっている。ジグゾー学習は、児童生徒をいくつかの小グループ(原グループ)にわけ、グループ内で担当す

る分野を割り振る。次に、同じ分野に割り振られた児童生徒が集まり(カウンターグループ)、その分野について調べたり意見を出し合う。その後カウンターグループは解散し、児童生徒はもとの原グループに戻る。原グループでは、各児童生徒が割り当てられた分野の専門家として、グループ内の仲間たちに互いに教え合う。

バズ・セッションとは、全員が討議に参加することを促す手法である。あるテーマについて小グループで話し合わせる。次に、各グループの代表が全体に対してグループの意見を発表しあう。次に、グループ全体で話し合う。

No.55 エリクソンの発達理論

正答： 2

解説： エリクソンの漸成図式(発達段階理論)の表(図)が頭に入っていれば解ける。易しい。

- 1 誤り。本選択肢の記述は、乳児期に当たる。
- 2 正しい。
- 3 誤り。本選択肢の心理・社会的危機の記述は、幼児期初期(早期幼児期)を指す。また、性差に敏感になったりするの「遊戯期」の特性である。
- 4 誤り。本選択肢の心理・社会的危機の記述は、青年期である。成人前期では「親密性対孤立」である。
- 5 誤り。成人期は「統合対絶望」ではなく「世代性(生殖性)対停滞」であり、そこから得られる徳(活力)は「知恵」ではなく「世話」である。

社会心理学

No.96 社会的影響に関する英文

正答： 4

解説： 社会的促進と社会的抑制の説明にあたるものを選ぶ課題。英語自体は易しいので各選択肢が何の理論かはすぐわかるだろうが、正答を選ぶのは案外難しいかもしれない。しかし社会的促進・抑制を説明する理論として、動因理論があることを想起できれば、迷わず4を選べるだろう。

ざっと訳すと以下の通り。

「多くの研究が、遂行成績は単独で作業をするときに比べて他者の存在がある方が促進されることを示してきた。しかしながら、多くのケースが示すように、結果は常にそうなるわけではない。他者の存在が遂行成績に逆の効果を示すことも明らかにされた。すなわち、他者の存在がときには、単独で作業するときよりも悪い成績を示すのである。」(←社会的促進・社会的抑制)

- 1 ○○は、人々は討議前よりもある状況での集団討議に参加した後でよりリスクな行動を主張しやすくなることを見いだした。(←集団極性化)
- 2 ○○は、たとえある人がその状況が緊急事態で、誰かがとにかく助けを必要としていると判断しても、他者の存在によって責任の分散が生じ、(援助)行動を思いとどまらせることになりうることを見いだした。もし援助可能な他者であっても、各個人が援助の個人的な義務をあまり感じなくなる。

3 ○○の分析では、協調の問題と動機づけのロスが原因であると考えた。これらの要因を実験的に分離して試みた研究者もいたが、どちらの要因も集団の生産性のロスに影響していた。(←社会的手抜き)

4 覚醒水準が薬物により操作された○○の動物研究の分析に基づけば、優勢な反応は単純な課題ないしなじみのある課題での遂行成績を改善したが、複雑ないし新規の課題では成績を悪化させた。(←ヤーキス・ダッドソンの法則)

5 社会的影響に対する二つの動機づけのアプローチを土台として、○○は、規範的な社会的影響は他者や他のグループや自身への肯定的な期待に同調することを含んでおり、それに対して、情動的な社会的影響は、他者が提供する現実のエビデンスとしての情報を受け入れることを含んでいると理論化した。(←情動的影響と規範的影響)

No.97 潜在連合テスト(Implicit Association Test: IAT)の説明

正答: 2

解説: これは一度でも IAT をやってみた人ならすぐにわかる問題。IAT の日本語版のテストを試せるサイトがあるので、一度試しておくとい。 <https://implicit.harvard.edu/implicit/japan/>

1 IAT が測定するのは、他者はもちろん自分でも把握できていない態度である。

2 正しい。

3 誤り。図 1 の反応時間が長くなるのは、「A 国」と「良い」の連合が弱いからである。したがって、反応時間が長くなるのは A 国に好意的でないことを意味する。

4 質問紙の場合、意図的無意図的に回答が歪曲されることがある。また回答者自身がそう思いこんでいる態度が測定されることもある。このため、しばしば現実の行動をうまく予測できないという欠点がある。

5 IAT は、刺激に「自己」「他者」「好ましいもの」「好ましくないもの」などを適宜選んで設定すれば、自尊感情などの感情的、パーソナリティ的なものも測定しうる。

No.98 集団に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答: 2

解説: 社会心理学の歴史について知識がないと難しい問題。

1 誤り。正しくはマクドゥーガル(W. McDougall)である。アメリカにおける最初の社会心理学の書物は、社会学者ロスの「社会心理学」と心理学者マクドゥーガルの「社会心理学序説」であり、両者はともに 1908 年に出版された。ロスの本は、フランスのタルドの影響を受けた集団指向の社会心理学だったようである。

2 正しい。「集団心(group mind)」の概念は後の心理学者らによって否定された概念である。

3 誤り。正しくはキャッテル(R.B.Cattell, 因子分析とか流動性知能で有名)である。オルポート(兄の Floyd Henry Allport の方である。要注意。)は、1924 年に公刊した「社会心理学」の中で、集団心理学などありえない、あるのは個人心理学だけであると主張した。また彼は、行動主義のシンパ

で、民族精神とか集団心といったものを非科学的であるとして否定し、これを集団錯誤と呼んだ。

4 誤り。レヴィンこそがグループダイナミクスの創始者なので、これを批判するということはありません。レヴィンは、彼の場合理論から集団を力動的全体(dynamic whole)としてとらえ、個人間の相互依存性で考えようとした。そしてグループダイナミクスを「全体としての集団の構造内に、集団のある部分や、全体の変化によって誘導された結果として生じた集団の自己調節的な変化の科学的分析」と定義した。

5 誤り。ソシオメトリックテストは「集団のフォーマル構造からメンバーが受けている影響を測定する方法」ではなく、集団成員間の「好き・嫌い」といった感情的関係にもとづいて集団構造を解明しようとする方法であり、モレノによって考案された。

モレノはソシオメトリーを、「集団内のメンバー間の魅力と反発の型を分析して、その強度や頻度を測定することによって、個人の行動特性、個人の集団に対する関係や位置、さらには集団全体の構造や発展の状況を発見し、記述し、且つ評価する測定法である」としている。

(引用：梅本堯夫・大山正 心理学史への招待 サイエンス社、末永俊郎・安藤清志 現代社会心理学 東大出版会)

No.99 判断の誤り

正答：1

解説：認知的なバイアスやヒューリスティックについての問題。易しい。

1 正しい。これとは反対の「割増原理」というものもある。「一見不良そうな若者が電車内で老人に席を譲る場面を目撃すると、過度にその若者が親切で道徳心溢れる人だと思ってしまう」場合などである。

2 誤り。コントロール幻想の説明は正しい。三文目が誤りで、これは基本的帰属のエラーの説明である。コントロール幻想は、随伴性の錯覚で説明されることがある。すなわち、先行事象(行動)が後続事象(結果)をコントロールしている度合いを過大視する傾向である。

3 誤り。一文目は錯誤相関ではなく、基本的帰属のエラー(外的な要因よりも、個人の傾性的要因を過大視する傾向)である。二文目以降の錯誤相関の説明自体は正しい。錯誤相関の典型的な例をあえて挙げるなら「女性ドライバーは事故を起こしやすい」「精神障害者は凶悪な事件を起こしやすい」といったものがある。

4 誤り。「同一の結果に対して、行為者本人とその行動を見聞きした他者との間で、異なる要因に帰属すること」は、「行為者-観察者バイアス」である。

5 誤り。二文目までは正しい。セルフ・サービングバイアスの説明としては二つほどある。一つは、自己高揚バイアスによる考えである。つまり、人は自尊感情を維持・高揚するべく動機づけられている(自己高揚動機がある)ためとする考え方である。もう一つはミラーとロスによるものであり、自己高揚動機概念を使わずに、次の3つ認知的歪みを指摘している。つまり、人は一般に①失敗より成功を予期する傾向があり、期待に即して結果を解釈しやすい傾向、②失敗し続けた時よりも成績が次第に向上し成功に向かった時の方が努力と結果の共変を知覚しやすい傾向、③自分の行

動と望ましい結果の同時生起には注目するが、自分の行動と望ましくない結果の同時生起は無視する傾向があるという。これらの認知的歪みの影響で、自己高揚バイアスが生じると考えられる。

(引用: 山本他 社会的認知ハンドブック 北大路書房)

No.100 マス・コミュニケーション

正答: 3

解説: ここ数年ほどまったく出題されなかったマス・コミュニケーション関連の問題である。シケシンの改訂版社会心理学編を使っていた人は、過去にこれらの問題が出ていたことに気づいただろう。

1 誤り。一文目は正しい。二文目、オールポートとポストマンの流言の発生モデルでは、「主題が重要であるほど、根拠が曖昧であるほど、流言は広がりやすくなる」と考える。換言すれば「流言の流布量は、主題の重要さとその根拠のあいまいさの積に比例する」という。

2 誤り。沈黙の螺旋とは、少数派の人は意見表明をしにくくなり、多数派の人はより声高になっていき、その結果、多数派の意見が優勢になり世論になる、という考え方。

3 正しい。

4 誤り。「多元的無知」とは、集団や社会の成員が互いに、自分は行為と感情や意見が一致していないと思うのに、他人は行為と感情や意見とが一致していると推測すること。成員が互いに、各自の私的な感情や意見を知らないために起こる認知状態で、傍観者効果の説明などでよく見る。

5 誤り。本選択肢の記述は、カツとラザースフェルトの「コミュニケーション二段の流れ」である。ガーブナーの教化効果とは、マスメディアの影響に関する理論的概念で、テレビドラマなどのフィクションに長期的・反復的に接すると、その個人の現実認識がテレビドラマに描かれる現実像に近いものになるというもの。

(引用: 高橋 増補改訂 試験にでる心理学 社会心理学編 北大路書房)